
正しい温泉の入り方

翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正しい温泉の入り方

【Nコード】

N3747M

【作者名】

翠

【あらすじ】

【アルト×シェリル】アルシェリ恋人未満設定。みんなで温泉に行ったアルトとシェリル。

※拍手おまけ話あり

(前書き)

某萌えスレの温泉ネタに反応してみた。

萌えスレに落としたのはこれがはじめてでした。加筆修正してあります。

「なあ、シェリル……」

「なあに？ アルト」

アルトはシェリルの、温泉につかりほてりがうかがえるバラ色の頬よりも、柔らかなストロベリーブロンドを結い上げ、後れ毛が艶かしいようなバスタオルからこぼれんばかりの豊かな胸元に張り付いたサクラの花びらに釘付けになっていた。

決して不埒な理由ではない。

「お前、まさかとは思うが、バスタオルの下に何も着てないってことはないよな？」

「どうして？ 着てないわよ」

「なっ！？ なんで！？ ココは混浴だぞ！？」

慌てて周囲を見回し誰もいないことを確認するアルトを見て、シェリルは不思議そうに小首をかしげた。

「何言ってるの、アルト。バカにしないでよね、私だって温泉の入り方ぐらい知ってるわ。TVで見た温泉スペシャルでは皆バスタオルを巻いて温泉につかっていたもの。混浴でもそうじゃなくても。何か間違っている？」

シェリルは両手を腰に当て、自信たっぷりに言い放つ。それを見

てアルトは少々脱力した。

「あ……あれは、撮影用でだな……」

「あら、じゃあどうしたらいいの？ 脱いだらいいわけ？」

「バツ、バカ!!」

勢いよくバスタオルに手をかけたシェリルを、慌てて止めようとしたアルトの手が……結果的にシェリルのタオルをずらしてしまった。

「……………」

「……………あ。……………」

バチーーーーン!!

「ま、また見たわねっ!! このスケベっ!! エロガキッ!!」

アルトの頬を打って赤くなった手のひらよりも、更に真っ赤になったシェリルが胸元でタオルを抑えて怒鳴りつけた。
頬を押さえながらアルトが反論する。

「な、なんだよっ。お前がタオルを取ろうとするから、止めようとしたんだろっ!!」

「なっ……ホントに取るわけないでしょ!! バカッ!」

アルトはシェリルのおでこを軽く指ではじいた。

「大体、なんでお前はそう無防備なんだよっ。混浴なんだぞ!?!? ちったー気を使え!」

「痛いわね! どうしてよっ。温泉はみんなこういうスタイルで入ってるじゃない!!」

「だからあれは撮影用だと言ってるだろうが!!」

「じゃあ、どんな風にして入るのよっ」

「ココは水着なんだよっ」

「え?」

シェリルが視線を落として確認すると、アルトはちゃんと水着を着ていた。

「……そっ、そんなの、聞いてないわよっ。それに、タオルだけに入っても大丈夫よっ、アルトがいるもの!!」

「他のヤツも入ってくるだろーが!!」

「見えないように気をつかいなさいよ!」

「できるかよ!」

「やれやれ……『清掃中』の札でもかけておこうか? お姫様に女王様」

「え？」

「え？」

「全くだ。もうすぐ皆が入ってくるぞ」

アルトとシェリルが声のした方を振り向くと、呆れたように肩をすくめたミシエルと、腕組みをしてうなづいているクランがいた。

「まあ、俺としてはこのまま魅力的な女王様の姿を見つめているのは悪くないんだけど……ぐはっ……」

「何か言ったか？ ミシエル。行くぞ」

クランが腹を抱えこんで悶絶しているミシエルを引きずって浴場から出て行く。

「……………」

「……………」

アルトは、知らずにつかんでいたシェリルの肩がひんやりしているのに気がついた。

「あの、その……なんだ……そんな格好のまま突っ立ってたら湯冷めしちまう、つかれよ」

「ええ……」

シェリルが湯船の中を泳ぐ泡を追いかけてはつかみを繰り返しながら、ほんのりと頬を染めてつぶやいた。

「水着……だったのね」

「ああ、ココではな。普通の温泉はタオルを湯船につけてはいけないんだ」

「そうなの。てっきりタオルをまいて入るものだと思っていたわ」

「まあ、TVや広告を見てそう思い込むのは無理もない。最初に言っておかなかった俺も悪いしな」

困ったように頭をがしがしとかくアルトを見て、シェリルはしょんぼりとうつむいてつぶやいた。

「……ごめんなさい、アルト」

「なんだよ、気持ち悪いな。お前が謝るなんて」

「なっ、なによっ。せつかくこのシェリル・ノームが謝ってあげてるっていうのに！」

「なんでそう上から目線なんだよっ！」

「悪い!？」

また口げんかを始めた二人には、『清掃中』の札にかえ、他に誰も入って来ないようにしていたクランとミシエルのぼやきは聞こえない。

「やれやれ、当分風呂には入れそうにないな、ミシエル」
「全くだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3747m/>

正しい温泉の入り方

2010年10月10日14時05分発行